

7. 『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』 に対する反響について

舟 橋 智 哉

1995年3月本目録が出版され内外の研究機関や研究者に寄贈されたが、その反響の一部を紹介しておきたい。まず、平川彰博士を始めとして国内の研究者から次のような賛辞が寄せられた。

- 1) パーリ仏教の研究に大きな御貢献と存じます。これを糸口にさらなる研究が進められることを期待しています。
- 2) 立派な学問的伝統のある貴学ならではの出版と存じ、斯学に貢献するところ大であると確信いたします。
- 3) 長年に亘る皆様方の御苦勞の結晶かと感服すると共に、その豪華な出来映えに感服を深くしております。
- 4) 長い年月をかけたお仕事だけあって実に立派な目録を完成されたことにごより敬意を表したいと存じます。
- 5) 長年にわたる夢が実現し、世紀の出版とも云いうる名実ともに立派な目録を完成されましたことを衷心よりよろこぶとともに、この仕事に従事された長崎教授をはじめとする諸先生の御努力に対して深く感謝いたします。

海外からも K. R. Norman 先生ほか諸研究者より次のような手紙が寄せられた。

- 1) とても美しく印象的な作品であり、大谷大学図書館は価値ある貝葉写本を所蔵している。
- 2) 私のカタログの仕事の中で最も価値あるお返しである。
- 3) 早速学術研究のために役立たせていただきます。
- 4) 広く日米間の交流及び相互理解を深めることと信じます。

また1997年以降相次いで外国の学界において三つの書評が発表された。これらの書評には『目録』に対する賛辞とともに不備な点、あるいは多くの補遺すべき事項も指摘されており、有益である。

まずイギリスの Pali Text Society 前会長 K. R. Norman 先生の書評を紹介する。

Buddhist Studies Review Vol. 14-No. 1/1997

書評 K. R. Norman

大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録 大谷大学図書館 京都 1995年 778ページ

大谷大学図書館は、クメール、ビルマ、モン、ラーンナー文字表記のパーリ聖典貝葉写本を多く所蔵している。これらのうち、クメール、ビルマ、モン文字表記の64の貝葉は、たぶん1897年ピプラーヴァーで仏舎利の発見直後、タイ国王により寄贈されたのだらう。これらの写本には挟板がついており（いくつかには絵が描かれている）、美しいインド布で覆われているから、良い保存状態にある。一方それ以外の写本コレクションはどのように大谷大学図書館に来たか分からない。その大半がラーンナー文字表記であるが、少数はクメール文字表記である。挟板がないため、それらは封筒に入れられており、あまり良い保存状態にない。

日本語と英語による解説では、大谷大学図書館貝葉写本コレクションとその目録が作成された経過とについて記述されている。目録には26ページにわたって44のカラー図版が掲載されている。それらは、いくつかの写本、使用文字の示例、いくつかの挟板、包布の図版である。そこには様々な表記の文字と数字の表と、参考文献一覧表がある。

所蔵品は2つの部分に分かれる。(1)国王の所蔵品 (2)その他、である。最初の部分(1-686ページ)は、ディーガ、サンユッタ、アングッタラ・ニカーヤを除く広範囲にわたるパーリ聖典と、ティーカーとアヌティーカーからなる註釈文献を含む。アビダルマ文献に関する註釈文献コレクションは特に豊富である。そこには聖典でないジャータカと歴史書、文法典籍もある。

二番目の部分(687-744ページ)は、国王の所蔵品に含まれないラーンナー表記写本とクメール写本からなる。後者の中には、ミリンダパンハーといくつかのアビダルマ文献がある。ラーンナー写本はパーリ語とラーンナー語の混淆で書かれ、その大半がジャータカ文献である。これらの写本の価値は、少なからず、今日までラーンナー写本の研究がほとんどなされていないということにあるのである。この分野の研究が今後急速に進歩することが望まれる。

本目録はそれぞれの文献に対して詳細な資料を提供する——そのうちのいく

つかは日本語が読める人だけが理解できる。すなわち、それらは、その文献の原典とローマ字表記の標題、CPD に記されているその文献の分類番号、大谷大学図書館請求番号、使用言語と使用文字、ページ数と、貝葉の側面にぬられた塗装を含む貝葉形態、貝葉の保存状態、である。その目録はコンピュータ利用で作られた。光学スキャナーの使用のおかげで編集者は原典のそれぞれの文献の巻頭1行半、巻末1行半を掲載することができた。記入形式の最後の部分は、貝葉写本文献と既刊文献、例えば PTS 版の相当ページとの関係についてである。目録の使用は標題一覧表を使うと容易になる。2つに分かれた標題一覧表もあり (pp. 745-769, 770-773)、両方の部分を含む索引もある (pp. 775-778)。

T. W. Rhys Davids は、1881年パーリ・テキスト・ソサエティ (PTS) を創設した。その目的は、それまでヨーロッパやアジアにあったパーリ語の写本を編集すること、そしてできる限り英訳することである。それら初期仏教文献の宝庫は「編集されず」、実質的には「利用されていなかった」ため学生たちは使用できなかった。その当時ほんの僅かな図書館しか、所蔵しているパーリ語やその他の南アジア言語の写本を目録化していなかったからである。PTS の創設以後100年の間に写本の一覧表や目録が *Journal of PTS* 中の論稿や単冊の雑誌か出版物として着実に出版されてきた。そして、大学やその他の研究機関の図書館が所蔵している写本について少しずつよく知られるようになった。大谷大学図書館が貝葉写本の価値あるコレクションを蔵し、この美しい印象深い目録が発刊された今、それらを使用する学者の数が増えることを私達は期待する。

次にバンコックにおける Fragile Palm Leaves 協会の Peter Skilling 氏の書評を紹介する。

Fragile Palm Leaves for the preservation of Buddhist Literature Vol. 2. Oct, 1997, pp. 4-5. 書評 Peter Skilling

大谷大学図書館 (編纂) 大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録。大谷大学図書館、京都、1995年、lxxxi+778ページ。

専念した日本学者 (ラーナー本には Aroonrut Wichienkeo が協力) のチームによる十年間の努力の結果である、この美しくできあがった本は、クメール、ビルマ、モン、ラーナー文字表記の大谷大学図書館所蔵貝葉写本を目録

にしたものである。64の写本—クメール版59、ビルマ版4、モン版1—は1900年にタイのラーマ5世から大谷光演氏へ贈られた。ラーナー写本の由来はわからない。

最初に訓覇曄雄氏（大谷大学学長）の序文と長崎法潤氏の解説がついている。目録記入形式のフォーマットについての凡例、略語のリスト、文献目録とクメール、ビルマ、モン、ラーナーの「文字と数表」がある。表にある文字と数は写本から直接スキャナーで写しとっている。カラー図版は写本の違ったタイプの見本をだしている。目録の第一部はタイ王から贈られたクメール、ビルマ、モン版のテキストを示す。第二部はラーナーとその他の写本を扱う。分類の順番と体系は *Critical Pāli Dictionary* の *Epilegomena* に従う。最後にタイトルのリストがある。

独立した束 (*phūk*) ごとの、それぞれの写本の紹介は明確である。それぞれの束の最初と最後をスキャナーによって複写している。目録は *Vinaya* の独立した規則 (*pārājika*, *nissaggiya*, *pācittiya*)、*Sutta* の経のタイトルのような内部項目の箇所を記している。写本の内容は *Pali Text Society* や (*Aṭṭhakathā* にとっては) *Simon Hewavitarne Bequest* シリーズのような刊行本と参照されている。

テキストは四言語で書かれている。主にパーリ語だが、モン語 (1 テキスト)、タイ語 (2 テキスト)、ラーナータイ語 (第二部) もある。クメール版写本はタイで入手したことからカンボジアよりもタイで作られたものであろう。このことは目録の解説 (pp. lv-lvi) に記されている。多くの指摘によってこの推測が確実なものになる。 *Abhidhammatthasaṅgahaṭṭikā* と *Paramatthamañjūsāra* (ママ) は (私の理解が正確ならばカバーフォリオに) タイ文字で筆記者達の名前が書いてある。前者の *Phūk* 5 と 6 には句 (*Wat*) *Liap* (= *Wat Rājapūraṇa*: pp. 536, 537) とある。 *Aṭṭhasālinī* (pp. 343-361) はそれぞれの *phūk* に、タイ文字とタイ語で、仏教暦2343=CE1805 と記されている。別のカバー葉にはクメール文字にタイ語の論評がある。完全な二つのテキストのようにクメール文字でタイ語の多くの論評と奥付がある (以下参照)。

Aṭṭhasālinī はバンコク第一統治時代からのとても記念すべき日付を記している。第一部のその他の写本の奥付に日付を私が見つかなかったから、それらの日付を割り出すことは不可能である。言うまでもなく (たぶん) それらは

より新しいだろう。

それらの写本は完全にそろった三蔵ではないが、多くの代表的なテキストを含んでいる。Samantapāsādikā(クメール、ビルマの両文字)とともに、Vinayapitaka の数巻、Papañcasūdanī とともに、Majjhima-nikāya、Khuddhakanikāya の巻の多くのテキストあるいは註釈、Visuddhimagga と Paramatthamañjūsā である。アビダンマ七論全てが、註釈、復註とともにある。そしていくつものアビダンマ論書がある。多くの vamsa と文法テキストがある。

非聖典のなかで興味深い著作は、Paññāsajātaka (phūk8-10, 12-17), Sārasaṅgaha, Mahābuddhaguṇanvāta (ママ)-atthakathā, Paramatthasārakathā, Paṭipattisaṅgaha である。最初の二つは PTS 版に存在する。最後の三つは本 の形で出版されたことはなく、CPD の Epilegomena に記録されていない。タイの伝統では、Sārasaṅgaha はチェンマイの Nandācariya によって作られたか、あるいは、少なくとも校訂された、という。当然、大谷写本奥付は“sārasaṅgahā nandācariyena racitā samattā niṭṭhitā”と記して、この伝統を踏襲している。Mahābuddhaguṇanvāta-atthakathā, Paramatthasārakathā と Paṭipattisaṅgaha はバンコクの国立図書館にある。Jinakālamālinī (4. 2. 1) の六つの phūk の写本もある。Trailokyavinicchayaniriyakathā (phūk 2 だけある) はパーリではなくクメール文字でタイ語で書かれている。その phūk は、最初の治世に似たタイトルで編纂された作品の二校訂本のどちらかの niriyakathā 章に属しているにちがいない。Ānisaṅgaha (Ānisaṃsasaṅgaha?) もタイにある。

別の興味深い作品は、Amatarasadhārā (4. 4. 1, 2), 7 phūk から成る Anāgatavamsa の ṭikā, Dasabodhisatta-uddesa (4. 4. 2) の版である。その長さからして Jayamaṅgalagāthā (4. 5. 2) は、短く人気のある偈の註釈にちがいないが、それはパーリ語で刊行されたことはない。

訓覇と長崎(原稿は Nakamura とミスプリント)が記したように、ラーンナーの文献はほとんどわかってない。大谷所蔵の中で一番古い写本、Dāthāvamsa の日付は1750年で、一番新しい写本の日付は1887年である。その写本は kammavācā、非聖典經典、ānisaṃsa, jātika と abhidhamma テキストを含む。写本の一つは北タイの Phrae で書かれた。三テキストは Shan 州で購入されたと英語で記してある。それらはおそらく Tai Khun テキストであろう(別のもの

であるかもしれないが)。

細部まで行きとどいた本目録は他の目録のモデルになるであろう。大谷大学の貝葉コレクションは、広範で様々なテキストを含んでいる。さらに、仏教の写本伝統と、パーリとラーナー文献の将来の研究のために役立つ資料を提供する。本目録によって、そのような大谷大学のコレクションに近づきやすくなっている。

最後に Primoz Pecenko 博士の書評を紹介する。

Indo-Iranian Journal 41 : 301-304, 1998.

書評 Dr. Primoz Pecenko

大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録。大谷大学図書館編集。京都。大谷大学図書館。1995年。lxxxix+778ページ(値段：研究所寄贈、個人23.00円+郵送費。連絡先：〒603 京都市北区小山上総町大谷大学図書館 fax : 075-411-8152)

本書は大谷大学図書館所蔵のパーリ貝葉写本の詳細なカタログである。カタログは二部に分かれる。第一部：クメール、ビルマ、モン写本、第二部：ラーナー写本とその他の写本（ビルマ写本1部、クメール写本11部）。ラーナー写本については、すでに柏原信行「大谷大学図書館所蔵のユアン文学貝葉」『パーリ学仏教文化学』第2号（1989年3月、83-104頁）において論じられている。

目録見出しは次の形式で記入されている。標題(CPDに従う)：1. 貝葉写本の使用文字（スキャンした）標題とローマ字表記標題；2. CPD番号；3. 大谷大学図書館請求番号；4. 使用言語；5. 使用文字；6. 数量：a) 貝葉数量、b) 数量詳細、c) フォリオ番号；7. 貝葉形態：a) サイズ、b) 穴位置、c) 小口塗装、d) 保存状態、e) 記入行数、f) 記入寸法、g) 文字形態、h) 文字密度；8. 文献の巻頭：そのままの（スキャンした）貝葉文献の巻頭の約1行半；9. 文献の巻末：そのままの（スキャンした）貝葉文献の巻末の約1行半；10. 奥付：写本の日付、場所、書写者の記載の表示；11. 内容細目：章等；12. 注記事項：タイトル、ページ数、貝葉の形態について；13. 備考：貝葉文献と刊行文献の関係について。

私達の現在のパーリ文献の知識を考慮すると、大谷大学図書館所蔵貝葉写本は2つのグループに分かれる：1. 研究もされず刊行もされていない文献の写本と、2. 少なくとも幾つか刊行された文献の写本、とである。

1. 最初のグループの写本は例えば：

Pālimuttakavinayavinicchayaśaṅghanissaya, Vessantarajātakanissaya, Jātakaṭṭhakathāya Līnatthapakāsīnī, Mahābuddhaguṇaṇvāta-aṭṭhakathā, Paramatthasāarakathā, Paṭipattisaṅgaha, Ānisaṅgaha, Gaṇḍisaṅgiṇīdīpanī, Dippanīsaṅgiṇī, Dhātukathāṭīkāvaṇṇanā, Paccayadīpanī, Anuṭīkāśaṅgaha 等である。これらの写本の上述の形式の情報は、将来校訂したり研究する人々にとっても役立つ。特にそれぞれの貝葉文献の巻頭・巻末のスキャンされた部分（上記8-9）と書写者の奥付（上記10）は役立つ。もし、時々とても読みづらい写本のスキャンされた断片が、例えば C. E. Godakumbura の Catalogue of Ceylonese Manuscripts, Copenhagen : The Royal Library, 1980. のように、ローマ字に書き換えられているならば、本カタログはもっとよいものになったであろう。

2. 第二グループの写本に関する最も興味深い情報は、フォーマットの第13番に記されている。すなわち、貝葉文献と刊行文献の関係についての特記事項である。この情報は、幾つか刊行本がありとても有名な文献の場合でも、不幸にも常には記されていない。

多数のとても有名な文献の刊行本にも全く言及されていない。例えば：Nettipakaraṇa, Atthasālinī, Sammohavinodanī, Dhātukathā, Puggalapaññatti, Paṭṭhāna, Mahāvamsa, Milindapañhā 等である。これらの文献は全て Pali Text Society 版を含めて刊行本が数版ある。このカタログはしばしば刊行本と多くのたぶんあまり知られてない文献の CPD 番号を載せてない。例えば次のような刊行本にこのカタログは言及していない：

- Pālimuttakavinayavinicchayaśaṅgaha : edition : Pālim Be 1960 (CPD number 1. 3. 5 ; see Oskar von Hinüber, Handbook of Pāli Literature, Berlin/ New York : Walter de Gruyter, 1996, p. 158 ; from now on Handbook);

- Paññāsajātaka : edition : Paññāsa-ja Ee (PTS), Vol. I (1981), Vol. 2 (1983) (CPD number 2. 5. 10, 2 ; see Handbook, p. 135);

- Paramatthamañjūsā, Visuddhimaggamahāṭīkā : editions : Vism-mhṭ Se I (1925), II (1926), III (1927) ; Be I, II (1962) Ne I, II (1969), III (1972) (CPD number 2. 8. 1, 1 ; see Handbook, p. 124);

- Sārasaṅgaha : edition : Ss Ee (PTS) 1992 (CPD number 2. 9. 3 ; see

Handbook, p. 177);

- Maṅgaladīpanī : editions : Maṅg-d Ce 1927 ; Se I (1972), II (1974) (CPD number 2. 9. 10 ; see Handbook, p. 179);

- Abhidhamma-anuṭṭikā : edition : As-anuṭ together with As-mṭ Be 1962 (CPD number 3. 1. 12 ; see Handbook, pp. 166-68);

- Abhidhammatthasaṅgahaṭṭikā : edition : Abhidh-s-mṭ with Abhidh-s Ee (PTS) 1989 (CPD number 3. 1. 1, 2 ; see Handbook, pp. 161-62);

- Saṅkhepavaṇṇanā : edition : Abhidh-s-sv Ce 1930 (CPD number 3. 8. 1, 3 ; see Handbook, p. 126, n. 559);

- Yojanā-Abhidhammatthasaṅgaha : edition : Abhidh-s-mṭ-y Se I-III 1977 (repr. of earlier ed.) (CPD number 3. 8. 1, 22 ; see Handbook, pp. 175);

- Abhidhammāvikāsanī : edition : Abhidh-av-nṭ together with Abhidh-av-pṭ Be 1977 (CPD numbers 3. 8. 4, 1 (Abhidh-av-pṭ) and 3. 8. 4, 2 (Abhidh-av-nṭ) ; see Handbook, p. 160);

- Rasavāhiṇītikā : editions : Ras-ṭ Ce 1907 ; Ee (on Ras V and VI) in Ras (ed. Junko Matsumura), Osaka : Toho Shuppan, 1992, Appendix I, pp. 167-185 (CPD number 4. 1. 10, 1 ; see Handbook, p. 191);

- Nibbānasutta : edition : Nibbāna-s, Ch, Hallisey, JPTS 15 (1990) : 97-130 (CPD number 2. 11. 2 ; see Handbook, p. 201);

- Pathamasambodhi : edition : Patham Se 1994 (CPD numbers 2. 9. 11¹ ; see Handbook, p. 180 and n. 632).

このカタログに掲載されている写本はいくつかの束にわかれている。各々の束には見出しがある(例えば Nettipakaraṇa の写本は18束に分かれる。すなわち見出し ka-khaḥ, ga-ghaḥ 等) ; だからもしこれらの束の部分が少なくとも一つむしろそれ以上の存在する校訂本と比較されているならば、たいへん有益なものとなるであろう。

上述の刊行本に言及していないにも関わらず、『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』はパーリ研究にとっても役立ち貢献するはずである。なぜなら、まだ研究されていない多くの文献の写本についての情報を記しているからである。

以上のように本目録は諸先生方に感謝されており、今後の大谷大学図書館所蔵貝葉写本の研究が期待されている。